要　　約

報告番号	甲 ㊙ 第　　号	氏　名	岡　村　明　彦

主 論 文 題 名

Factors Affecting Cytokine Change After Esophagectomy for Esophageal Cancer
（食道癌手術後の血清サイトカイン値変化に影響を与える因子の検討）

（内 容 の 要 旨）

食道癌に対する根治手術は、最も侵襲の大きな手術の一つである。手術侵襲による過剰なサイトカイン産生は全身性炎症反応症候群から急性肺障害や多臓器不全などを引き起こしうる。また手術侵襲により免疫抑制が生じ、短期のみならず長期予後にも影響を与えうることが示唆されている。そのため、手術による生体反応を理解・制御することは非常に重要である。今回食道癌術後の血清サイトカイン値の変化を経時的に測定することで、生体反応を客観的に評価し、これに影響を与える因子について検討を行った。

対象症例は、2006年から2013年までの期間に、当科にて手術を施行した食道癌患者のうち、周術期の血清サイトカイン値を測定しえた90例とした。血清サイトカイン値（Interleukin-6(IL-6)，IL-8，　L-10）は、術前、術後1，3，5，7日目に採血を行い、酵素免疫定量（enzyme-linked immunosorbent assay: ELISA）法で測定した。術後のサイトカイン値の変化を評価し、これに影響を与える臨床病理学的因子（年齢、術前化学療法の有無、病期、手術到達方法、手術時間、出血量、早期経腸栄養の有無、術後感染性合併症の有無）について検討を行った。

対象症例のうち、開胸手術は25例（28%）で、胸腔鏡下手術は65例（72%）であった。食道癌術後の血清サイトカイン値はいずれも、術後1日目にピークを認め、以後漸減した。術後1日目のIL-6およびIL-8値は、術後SIRS（Systemic inflammatory response syndrome）期間と有意な相関を認めたが（$p<0.01$）、IL-10値においては有意な相関は見られなかった。術後1日目においては、上記臨床病理学的因子のうち、胸腔鏡下手術がIL-6およびIL-8値を有意に抑制し（$p=0.01$，$p<0.01$）、手術時間が有意に増加させる因子であった（$p<0.01$，$p=0.01$）。また、術後3日目から7日目の期間においては、胸腔鏡下手術および早期経腸栄養の導入がIL-6およびIL-8値を有意に抑制し、術後感染性合併症が有意に増加させる因子であった。

本検討においては、胸腔鏡下手術および早期経腸栄養の導入は、食道癌術後のサイトカイン変化を抑制しうる有用な方法と考えられた。また、長時間手術を避け、術後感染性合併症を起こさないような術中術後管理が重要である。